

「新入局員のぼやき」

医局日誌という物は E 本先生が、主に 60 代男性大学教授から寄せられる、主に機械系統に関するトラブルに優しくお答えするために存在すると本気で思っていたら、実は自由投稿型の日誌であるということを知り、ぜひ自分も自己紹介代わりに一言書かせていただきたいと進言したところ快諾してくださったので、失礼な文章であることを承知ながら投稿させていただくこととする。全国的にもキ〇ガイ豊かな才能を排出してきたことで御高名な〇〇〇ール高校を出た自分であるが、そういえば医局員の中にも函館ラ・〇一〇出身の方のお名前が・・・いや、これ以上何も言うまい。

自分がここに入局するきっかけは何を隠そう、この日誌にもたびたび登場される例の 60 代男性である。故郷の鹿児島で脳神経外科医の父、神経内科医の母に「自分は神経内科になりたい」と言ったところ、「U 川先生はとても素晴らしい業績をお持ちである上に非常に人格も素晴らしい方であるから、最初に彼のいらっしゃる所に習ってきてはどうか」と言われたのが始まりである。研修医で神経内科を志すにも関わらず、かくも御高名な U 川先生を存じ上げることも無かった自分であったが、鹿児島に講演に来られた際に U 川先生に初めてお会いし、熱烈な(?)勧誘があって今年の 1 月に当院を訪ねたのである。

最初の印象は「とんでもないところに来てしまった」である。新幹線から降り立った瞬間に周りは雪、雪、雪。そして寒いなの。余談ではあるが、自分の地元の鹿児島では 2016 年に 1 度だけ大雪が降り、スーパーマーケットやデパート、公共交通機関が全てストップして、強制的に家に引きこもる羽目になったことがある。福島に見学に向った日はその時の積雪量をはるかに超えるもので、「ああ、日本とは広いところだ」とつくづく感じてしまったのである。見学に向った際には先生方が「とんでもない日に来たね」「こんなに降ることは年に数回しかないから大丈夫」と仰ったのを聞いてだいぶ安堵した。たった 1 回見学に行っただけでその場で入局を決めた訳だが、なんと言っても魅力的であったのは先生たちの明るさである。当 HP 冒頭、教授が書かれていることであるが、「神経内科には暗いというイメージが付きものだが、少なくともうちは違う」ということをまさに肌で感じ、ここで働いてみたいと思ったというのが正直なところである。

ただ、一つ心配なことがある。何度も登場しておられる例の 60 代男性であるが、とにかく部下からのイジられ具合が尋常ではないのだ。そもそも自分はその男性の紹介でここに来たわけであるが、医局員の先生から開口一番「よかったねえ、あと 1 年でいなくなるよ」である。医局員から 60 代男性の話が出るときは決まって「方向音痴だ」とか「英語はよくできるけど日本語が怪しい」とか「全然大学にいてくれない」などの、客観的に判断しても悪口と認識できる類の内容ばかりである。しまいには「彼の輝かしい業績をまとめてみよう」と

思ったが、一生懸命考えても病棟のカンファランス室を新しくした以外にはなにも出てこない」などと言われている始末だ。自分が心配なのは、これら部下のイジりが、部下一同教授を敬愛しているが故の愛のあるイジりなのか、はたまた本気で悪口を言っているのか判断に苦慮するところである。

そんな心配を掲げながら業務に携わるようになって早 2 週間。とにかく学生の頃から初期研修を終えるまで不真面目だった自分にとって、ここにいる学生や研修医の方は非常にまじめで優秀であることを自覚している。例を挙げると、主に学生のお相手をされている Y 田先生が「もう 6 年生だからさすがに〇〇ぐらいは知っているよね？」と仰り、横で PC をカタカタして盗み聞きしている自分が「いや w 入局 1 年目でも知りませんが w」と思っていたら、学生が「知っていますよ、〇〇のことですよ」と即答し、何も聞いていないフリをしながら「こいつらマジか、なんで知っているんだ・・・」と思うことが挙げられる。誤解のないように言うておくが、このようなことは 1 日に数回は起こるのである。医局員先生方は自分の神経内科に対する知識を 5 年生、6 年生レベルか、あるいはそれ未満であると考えて接してくださることを強く願うばかりである。

その他病棟や医局にはさまざまなルールがあることを感じている。「神経学的な検査を行う際や検体を凍結保存する際は T 治さんに一報入れなければいけない」という実用的なものから、「I 口先生が病棟のカンファランス室で大音量でクラシック音楽を聴いていても絶対に突っ込んではいけない」「医局長を陰で操るシン・医局長が居て、シン・医局長に逆らうと消される」などといった不文律などがいい例である。

ここまでなんと言っても当科を魅力的であると感じる所以は、このような若輩者がかくも失礼な文章をあろうことか公式 HP に投稿しようとしているのに対してシン・医局長が快く原文のまま(もしかしたら修正が入るかもしれないが)投稿を許可して下さったことだ。このような自由は(たとえどんなに先生方が歯ざしりしていても)通常であれば許されないことである。

あまり書きすぎると来月あたりには名簿から消去される事態に陥りそうなのでこの辺でやめておくことにする。

たぶん次は同期で〇コ〇コ動画のヘビーユーザーである A 部先生が、二〇二〇動画の編集で遺憾なく発揮されている文才をここでも披露して下さるであろうことを期待して結びの言葉とさせていただきます。

本当にすいませんでした。